

天界第六號附錄(大正九年十二月二十四日第三種郵便物認可)
同十年三月二十五日發行

天文語彙

海老恒治編

(おの部)

オイレル(L. Euler)○瑞西生れの數學兼天文家、一七二七年以來、露國聖彼得堡に招聘せられて、數學及科學を講じたが名聲大に擧がり、頗る人に尊敬された。一七四二年には獨逸のフリードリヒ大王に招かれてベルリン學士院創立に當つたが、一七六六年まで其所に滞在中も始終露國から年金を受けてゐた。晩年には再び露都へ歸つたが、遂に兩眼の明を失したにかゝはらず數理研究を續けた。數學や天文學に關する著述は頗る多い。(一七〇七生、一七八一死)

おうしざ牡牛座(Taurus)○黃道に浴ふた十二星座の第二番目の星座。毎年太陽は五月の中頃から六月の末頃迄の間に此の星座を通過する。此星座は甚だ古く恐らくバビロン人が發明したものであらう

其頃(今から四千年前)春分點が此星座にあつた肉眼にも著しい星群が二つある。プレヤデス(Pleiades)とハイデヤス(Hyades)とが之れてある。(各の條を見よ)ア星は一名アルデバランと云ひ一等の赤星である。毎年二月の夕南中する。

オックスフォード大學天文台(Oxford University Observatory)一八七四年創立。主として天体物理學研究の設備を有する。デ・ラ・ルー氏(W. De La Rue)の殘した十三吋反射鏡及び新造の二十四吋屈折寫眞鏡がある。一八八五年ブリッツチャード(Pritchard)は此處で恒星光度表(Uranometria Nova Oxoniensis)を作つた。一八九三年以來ターナー氏(Turner)が台長である。

おとめざ處女座(Virgo)○黃道に浴ふた十二星座の第六番目の星座。毎年六月夕方方南中する。太陽は九月の末から十月の中頃迄の間に此處を通過する。此星座には現在秋分點があり、又天の河の北極があつて此の邊に星雲が非常に多い。ア星スピカ(Spica)は一等の青星である。

オペロン(Oberon)○天王星の持つ第四衛星で週期

十三日十一時七分。一七八七年ウイリアム、ハーセル發見、平均光度一四等。

おほいぬざ 犬座 (Canis Major)。オリオン座の東南に隣る星座で毎年三月の夕南中する。ア星はシリウス (Sirius) と云ひ恒星第一等の光輝を持つて居ることから歴史上にも非常に有名である。シリウスの正南方四度の所に M 四號と云ふ星團がある。**おほかみざ** 狼座 (Lupus)。トレミー星座の一つで、蝸座とセンタウル座との間にある。毎年七月夕方南中する。三等星三つ、他は皆微光である。

おほくまざ 大熊座 (Ursa Major)。北極に近い大星座でトレミー以來のものであるが特に其中で著しいのは所謂此斗七星である。今より三四千年には北極に今より最つと近くあつたので世界中何處から見ても是等の星は永久に地平線下に没しない。週極星 (Circumpolar Stars) であつた。故に航海や曆學上の標準として多くの國で用ゐられた。今もア星とベ星とを結んだ一直線は北極星を指してゐるので北極星を捜すに都合がよい。ゼ星は肉眼の二重星で傍 (十二分) に五等のアルコールが附

いてゐる。然し此ゼ星は望遠鏡的にも立派な連星であり近頃又更に分光器的にも連星であることが發見された。ベ星の南東に M 九七號と云ふ有名な星雲がある。

オボルツェル (Th. v. Oppolzer)。澳國ゲインナ大學教授、自宅に私立天文台を建て觀測と研究とに熱心した。天体運動論、軌道計算學、日月食論について權威ある著書が多い。測地學のためにも貢獻した。
(一八四一年生、一八八六年死)

オリオン座 (Orion)。トレミー星座の一つで大昔から大變有名である。牡牛座、双子座、犬座、小犬座等の間に挟まれ自からは赤道に跨つて居る美しい星座である。毎年二月夕南中する。一等星二つ、二等星が五つ、其他星數が甚だ多い。デ星、エ星、ゼ星の三つは正しく一直線上に並んで誰の眼にも着き易いから昔から三つ星と稱へられ、支那では參宿と云ふ。三つ星の南五度に有名なオリオン星雲がある。(後條を見よ)

オリオン座流星群 (Orionids)。毎年十月の末オリオン座から輻射する流星の一群である。

オリオン星 (Orion Star)。^〇 青白色の星でスペクトル中に水素及ヘリウムの線が簡單に出て居る種類を云ふ。此の種の星は特にオリオン座に多い。例へばベ星、デ星、エ星等皆之れである。之はハーヴァード分類法ではB型に當る。(あをぼしを見よ)

オリオン星雲 (Orion Nebula)。^〇 オリオン座の星あたりを包む大星雲で全面積は月の五倍もある。宇宙に浮游する大きな瓦斯團で水素が主成分である。我太陽系からの距離五百光年。

オーロラ極光 (Aurora)。^〇 高緯度の地方に於て高く空中に現はれる光である。北半球のものを北極光 (Aurora Borealis) と云ひ南半球のものを南極光 (Aurora Australis) と云ふ。何れも其原因は太陽から發出した電子が地球の磁極に集つて發光する現象である。太陽の活動に由つて消長するもので盛んな時には我國の北陸海岸からでも見えた事がある。

オルベルス (H. Olbers) 獨逸ブレンメン市の醫師で且つ天文家であつた。小遊星發見問題に熱心で多くの學者と共に研究に従事し自らパラス (Pallas) と

ヴェスタ (Vesta) とを發見し彗星も亦數箇發見した。^(一七八五生、一八四〇死)

(かの部)

かいわうせい海王星 (Neptune)。^〇 太陽系に屬する最遠遊星である。此星の發見については一八三〇年頃から歐米の學界に天王星の不規則運動から刺戟されて起つた問題が基になり英國ではアダムス佛國ではルベリエール理論的研究を試み、其所論に基いて伯林のガルレが發見したものでそれは一八四六年九月廿三日であつた。

海王星は平均七等半であるから肉眼では見えない直徑は地球の四倍、密度は五分の一、質量は太陽の一萬九千分の一である。太陽からの平均距離三〇、一一天文單位。軌道は頗る圓に近く離心率は百分の一にも足りない。

此星は衛星を一箇持つてゐる。一八四六年ラッセル (Lassell) の發見したもので光度は平均十三等其軌道面は黃道と一三八度の傾斜と持つて居るから立派な逆行星である。

海王星はハレー彗星を始めとして總計六箇の彗星を捕獲した。(彗星の條を見よ)

かいわうせいがいゆうせい海王星外の遊星(Ultra Neptunian Planets)。天王星の不規則運動に由つて海王星が発見された如く、又海王星の不規則運動に由つて更に外側の遊星存在すると考へる一派の人々がある。トッド(Todd)ピッケリング(Pickerling)ローエン(Lowell)等が最も熱心であるが、フランマリオン(Flammarion)等は週期彗星の排列から同じ問題を取扱つて居る。然し事實上の発見は未だ〜。

かいせん回歸線(Tropics)。赤道より南北に二三、五度離れた緯度圈で此を北回歸線(Tropic of Cancer)南を南回歸線(Tropic of Capricorn)と云ふ。前者は夏至の日に太陽の達する線で、後者は冬至の日に太陽の達する線である。

かいごうしゆうき會合週期(Synodic Period)。太陽及び地球に對して外の天体が同一の位置を繰返す週期を云ふ、例へば満月から満月まで即ち二十九日十二時間は月の會合週期である。又遊星で云

へば合から次の合まで或は衝から衝までは夫々の會合週期である。恒星の場合には其會合週期は恒星年に等しいから特に此語を使はない。左に主なる遊星の會合週期を掲げる。

遊星	
水星	會合週期 一一六日
金星	五八四
火星	七八〇
木星	三九九
土星	三七八
天王星	三七〇
海王星	三六七

かいせん海線(Sea Line)。廣く海上を望む場合に見ゆる水と天との境界線を云ふ。

ガウス(K. F. Gauss)。獨逸ゲッチンゲン大學教授若い頃小遊星セレスの軌道を計算して忽ち有名となつた。長じて益々理論的研究を積み、數學及び天文學上の論文が頗る多い。特に其の天体運動論 Theoria Motus Corporum Caelestium (一八九〇年)は有名である。一八三三年ゲッチンゲンに地磁氣觀測所を創立した。(一七七七生 一八五五死)